

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

研究代表者 木村 浩 特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチ研究企画部
参画機関 特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチ、一般社団法人日本原子力学会
研究開発期間 平成24年度～26年度

1. 研究開発の背景とねらい

原子力発電所に代表される社会的忌避感を内包する施設（迷惑施設）と社会とが適切な関係性構築を迫られる場面において、市民と専門家の当該技術に関連する認識のギャップは、それを阻害する大きな要因のひとつとして古くから指摘されてきた。そして、福島事故後に特によく聞かれるようになった「原子カムラ」という言葉は、この市民と専門家のギャップを示した端的な言葉として捉えることができる。

原子力業界は、なぜ社会から「ムラ」と認識されるのだろうか。「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の構成員の凝集力ばかりではない。「ムラ内部の構成員」と「世間 (Public, 集合としての市民)」との相互作用（ダイナミズム）によって、その2者の間に境界が生じた（境界をお互いが作り上げた）状態と捉えることができる。したがって、原子力専門家と市民との健全なコミュニケーションを可能とするために、この「原子カムラ」の境界を、内（原子力専門家）から外（市民）から「協働」して乗り越えていくための取り組みが必要であろう。

では、このような取り組みはどのようにして実行可能だろうか。私たちのグループでは、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップとはそもそも何なのか、なぜそれが生じたのかを、お互いの社会的リアリティを共有し、お互いに尊重する仕組みを作ることで、解決に向けた何かしらの方針が得られると考えた。

そこで、本研究では、市民と専門家が対等な立場で、お互いの間のギャップを深く認識し、尊重しあえるようなコミュニケーション・フィールドとして、市民10名程度、専門家10名程度で対等に話し合う「フォーラム」を提案・試行し、市民と専門家両者においてその効果を詳細に分析することにより、今必要とされるコミュニケーション・フィールド構築のための実効的な示唆を得ることを目的とする。

2. 研究開発成果

2.1 フォーラムが有すべき条件の整理とフォーラムの設計

フォーラムにおいて、もっとも重要かつ達成の難しい課題は、どうしたら異なるお互いを「尊重」できるようになるのか、ということである。そのためには、フォーラムへの参加者が、自分とは異なる考え方もあってもよいし、それが当たり前だと考えることができるようにならなければならない。そして、そのように考えることを良しとする雰囲気を作らなければならない。そのために、(1)参加者が公平だ／話題等が誘導的ではないと思える場作り、(2)冷静な話し合いを導く／その場を客観的に捉えられるような場作り、の2つの要件を配慮して、フォーラムを設計しなければならない。そこで、この2つの要件からフォーラムが有すべき条件を整理した。

(1)参加者が公平だ／話題等が誘導的ではないと思える場作り

参加者の決定に際して、社会調査を基にして、原子力に関する意見が偏らないように参加者を

選択した。また、フォーラムでの話し合いは、1グループ6～7名の「グループワーク」を中心として、ブレインストーミングを導入し、特定の人が話しすぎないようなコミュニケーション・ルールを設定するなど、市民と専門家が対等に話せる雰囲気作りをする。さらには、フォーラムで話し合うテーマは原則として参加者が決めるようにし、運営側の誘導や特定の人の意見をことさらに取り上げるようにならないよう、運営側のルールも設定した。

なお、フォーラムの目的を考えればお互いの立場や考え方を尊重することが第一義であって、何か具体的な提言などをするのではない、ということが確認され、オープンエンドのコミュニケーション・フィールドとすることとした。

フォーラムで話し合われたことは、チャタムハウスルールを準用して、個人が特定できない形にしてホームページ⁽¹⁾で公開した。これによって、参加者が何を話しても隠されないことを確認できるようにし、フォーラムの運用についての公平性を保証することとした。

(2) 冷静な話し合いを導く／その場を客観的に捉える

市民と専門家との間で、忌憚のない話し合いができるようにする必要がある。しかし、ともすれば感情的な話になり、話題がすれ違ってしまっただけでなく、結果としてお互いを「尊重」するということができなくなってしまう。そこで、既往の文献⁽²⁾⁻⁽⁴⁾を参考にして、コミュニケーション・マニュアル⁽⁵⁾を作成した。これは、ファシリテーターを含む参加者全員がコミュニケーションする際に意識すべきチェックリストとしての形を取っている。これによって、今、話されている内容が何かを見きわめ、話し合い「で」すれ違わないようにすることを期待した。

また、フォーラムのプログラムは、参加者にファシリテーターをなるべく経験してもらえよう、設計した。これによって、自分を話し合いの外に置き、話し合いを客観的に見るチャンスとする。ファシリテーションを経験することで、コミュニケーションのときに、自分と異なる意見に対しても冷静になれる。その場を客観視し、そのものとして受け入れることは、相手を「尊重」する第一歩となる。

フォーラムの具体的な設計については、若松らの研究⁽⁶⁾を利用した。若松らのワークショップ実践ガイドラインは5つの段階を経る。①「観察者の目的設定」（実施者の視点）、②「フォーラムの目的設定」（フォーラム参加者の視点）、③「テーマ研究、専門家ネットワーク」、④「市民パネル募集、決定」、⑤「フォーラムの内容、段取りの決定」である。そこで、①～⑤にしたがって、フォーラムを設計した。

2. 2 フォーラム参加者の選定

フォーラムの条件より、参加者の決定は、実施した社会調査を基にして、原子力に関する意見が偏らないように参加者を選択した。表1には実施した調査の概要が示される⁽⁷⁾。

首都圏住民の参加者選定について、まず、首都圏調査の質問紙調査回収時に回答者(500名)に、調査員がフォーラム参加者募集の資料を手渡した。その結果、応募者8名(女性2名、男性6名)であった。別途、性別・年齢のみを基準に不足分を補うため、関係者の知人に面識のない知人(4名)を紹介してもらった。計12名(女性5名、男性7名)から、「原子力発電への賛否」「性別」「年齢(20・30歳台/40歳代以上)」を基準に、それぞれほぼ同数になるよう、フォーラム参加者

10名（女性5名，男性5名）を選定した。

一方、日本原子力学会員の参加者選定について、学会員調査の質問紙調査対象者(1,400名)に、フォーラム参加者募集の資料を同封した。その結果、応募者27名（女性2名，男性25名）であった。「年齢（20・30歳台／40歳代以上）」「専門分野（【複数回答】「総論」「放射線工学と加速器・ビーム科学」「核分裂工学」「核燃料サイクルと燃料」「核融合工学」「保健物理と環境科学）」を基準に、フォーラム参加者10名（女性2名，男性8名）を選定した。

参加者選定後に、フォーラム参加者の原子力利用への認識・意見分布について、それぞれ首都圏住民あるいは日本原子力学会員とそれぞれほぼ同じであることを確認した。ただし、住民の参加者は「関心が高め」「中立的意見は少なめ」であった。

表1 実施した社会調査の基本情報

	首都圏住民への調査（首都圏調査）	原子力学会員への調査（学会員調査）
名称	第6回 エネルギーと原子力に関するアンケート	第7回 エネルギーと原子力に関するアンケート
時期	2013年1月5日～1月22日	2013年1月4日～2月5日
対象	首都圏30km圏内	日本原子力学会員
方法	割り当て留め置き法	無作為抽出1,400名に対し、郵送調査
回収数	500名	559名（回収率39.9%）

2.3 フォーラムの実施

2013年5月から7月にかけて、隔週土曜日に全5回のフォーラムを実施した。表2に全5回の基礎情報を示す。20名の参加者のうち、専門家1名が途中でリタイアした。その補填は行っていない。また、その他の参加者は途中で欠席はあるものの、最後まで継続した。2回欠席した者はいない。各回のテーマは参加者の意向を尊重して、研究者が決定した。

表2 全5回のフォーラムに関する基礎情報

	日時	テーマ	参加者
第1回	2013年5月25日 13:00～17:00	「原子カムラ」とはなんだろうか？	19名
第2回	2013年6月8日 13:00～16:30	なぜ、原子カムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？ そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？	17名
第3回	2013年6月22日 13:00～16:30	原子力に関心を持つためにはどうしたらよいか？無関心は本当にダメなのか？「原子力への関心」とはそもそも何なのか？	16名
第4回	2013年6月8日 13:00～16:30	原子力は本当に安全か？原子力は本当に必要か？原子力はやめることができるのか？エネルギーの中の原子力の位置づけは？	18名
第5回	2013年6月8日 13:00～16:30	もう一度考えよう・・・「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？	19名



▲グループワークは、6~7名の3グループで行う。どのメンバーとグループになるかは、くじ引きで決めた。話し合いはブレインストーミングの形を取り、そのルールも明確にして、参加者で共有した。



▲グループの中の1名がファシリテーターになり、グループの話し合いを進める。ファシリテーターもくじ引きで決めた。運営側からは各グループに2名のサブファシリテーターを用意し、ファシリテーターを支援した。



▲グループワークの後の全体共有の様子。3グループがそれぞれ話し合った結果を全員に話す。3グループのまとめはそれぞれ全く異なる視点で語られることがほとんどであり、参加者に多様な意見の存在を認識してもらえる機会となった。

図1 「フォーラム」の基本的な進め方（イメージ）

※実際の参加者情報は示せないため、研究者等が準備として行った模擬フォーラムの様子を示している

図1はフォーラムの基本的な進め方を示したものである。話し合いは基本的にはグループワークで行い、サブファシリテーターがそれを支援する。話し合った結果は全体で共有し、多様な意見の存在を認識できる構造になっている。

3. 今後の展望

フォーラムが終了した後、フォーラムの効果測定のために、参加者へのインタビューを実施した。その中で、フォーラムの目的である「お互いの間のギャップを深く認識し、尊重しあえる関係作り」に関しては、一定の効果を上げたことが確認できた。現在、(1)フォーラム参加者の「気づき」がどのようにして起こったか、(2)フォーラムの目的達成のためにどのような改善が必要か、という観点からインタビュー結果を詳細に分析している。これらの分析を受けて、第2期のフォーラム開催に向けて準備を進める。

本研究で実施したフォーラムは、特定の人に頼るシステムではないことが、特徴的であり、拡張性が期待できる。第2期フォーラムを通じて、フォーラムの持つ機能の明確化と、それを達成するためのシステム化を行い、本取り組みを社会実装するための知見をまとめる予定である。

4. 参考文献

- (1) <http://www.ponpo.jp/forum/>
- (2) Ortwin Renn, et al., Fairness And Competence In Citizen Participation, Springer (1995)
- (3) フラン・リース, ファシリテーター型リーダーの時代, プレジデント社 (2002)
- (4) 堀公俊, ファシリテーション入門, 日本経済新聞社 (2004)
- (5) <http://www.ponpo.jp/forum/pdf/2013CommunicationManual.pdf>
- (6) 若松征男, 科学技術政策に市民の声をどう届けるか, 東京電機大学出版局 (2010)
- (7) 調査結果の詳細はホームページ参照 <http://www.ponpo.jp/forum/gakkai24.html>